The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	21世紀に読む『侍女の物語』（The Handmaid'sTale）：アトウッド作品におけるアメリカとラプンツェル
Author(s)	安保，夏絵
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 5-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62028
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

21 世紀に読む『侍女の物語』（*The Handmaid's Tale*）

――アトウッド作品におけるアメリカとラプンツェル――

安 保　夏 絵

1．はじめに

マーガレット・アトウッド（Margaret Atwood）は 1939 年にカナダのオタワで生まれ、ハーバード大学大学院で研鑽を積んだ女流作家である。森林昆虫学者の父をもつ彼女は幼い頃からケベック北部の湖畔で暮らしながら、オタワやトロントを行ききしていた。テレビやラジオのない生活を送っていたアトウッドは読書に没頭し、やがて小説だけでなく詩や児童書、批評を数多く発表してカナダ文学の勃興に大きく貢献した。とくに 1970 年代のアメリカで起きたフェミニズム運動にも献身的な姿勢を見せている。

アトウッドは被植民地国家としてのカナダや脅威となる大自然を前にして人間や動物が懸命に生き抜くことを「サバイバル」と呼んでいる[1]。また、地球環境問題に関心をもつアトウッドは、細菌兵器によって滅亡した人類の近未来を描く『オリクスとクレイク』（*Oryx and Crake*, 2003 年）や、カナダ北部にある主人公の故郷が恐怖の場（墓場）として描かれる『キャッツ・アイ』（*Cat's Eye*, 1988 年）を発表する。

初期のアトウッドは 1970 年代から模索されてきた被植民国家や天災をもたらす自然といったカナダの独自性をだすためにも、トロントなどを舞台にカナダ人を主要登場人物とする小説を執筆した。そのようなカナダの女性や自然を主題にした小説が多いなか、1985 年に発表された『侍女の物語』（*The Handmaid's Tale*）は架空のギレアデ共和国が制するアメリカを舞台とし、キリスト教原理主義勢力の支配下にある国民が描かれている。その後、『またの名をグレイス』（*Alias Grace*, 1996 年）で、主人公はカナダでの刑務所暮らしののちにアメリカに渡って幸せに暮らしており、最終目的地としてのアメリカも登場する。本稿においては、アトウッド作品におけるイギリスとフランスの植民地連合としてのカナダではなく、アメリカとその女性の描写の分析を試みる。

---

[1] アトウッドが扱うサバイバルとは「端的に言って、歴史的に声を奪われてきたマイノリティたる女性」の状況を指している。「ジェンダー問題を人権問題の重要な課題のひとつとするアトウッドは、70 年代には、犠牲者としての女性の問題をまずクローズアップ」した。（『サバイバル――現代カナダ文学入門』 114）

２．２１世紀に読む『侍女の物語』

はじめに 1985 年に発表された『侍女の物語』を今また読みなおす必要性を明らかにする。そこでは、アトウッドの作品に見られる先見性に着目することで 21 世紀のアメリカを予見するテクストの特質が見えてくる。

この議論をするにあたり、アトウッド作品における予見性とアメリカ表象のひとつの例として『寝盗る女』（*The Robber Bride*, 1993 年）をあげたい。『侍女の物語』よりもあとに発表されたこの作品は、1990 年に勃発した湾岸戦争[2]の直後に書かれている。この作品は、1970 年代に死んだはずのズィーニアが 1990 年代に再び 3 人の友人たちの前に現れるところからはじまる。謎の女ズィーニアは「暴力、戦争、ガン、売春、麻薬等々、20 世紀という時代のトラウマを一身に背負った感のある」（鷲見 253）亡霊だ。物語の終盤では、友人たちがトラウマに折り合いをつけて明るい未来に向かっていこうとする反面、湾岸戦争後の世界は以下のように決して安全ではないものとして描かれている。

> The Recession is thickening, there are rumors of big-company bankruptcies, famine is rolling over Africa; in what was one Yugoslavia there is ethnic feuding. Atrocities multiply, leaderships teeter, car factories grind to a halt. The war in the Gulf is over and the desert sands are spackled with bombs; the oil fields still burn, clouds of black smoke roiling out over the greasy sea. Both sides claim to have won, both sides have lost. It's a dim day, wreathed in mist. (*The Robber Bride* 465)

「両陣営とも敗れた」（"both sides have lost"）という未来、すなわち決して安全とは言えないアメリカが示唆されている。鷲見が指摘しているように、湾岸戦争の 10 年後の 2001 年 9 月 11 日のアメリカでは同時多発テロが勃発し、アメリカはもはや安全な場所ではなくなっている。「「アメリカは安全だ」という神話が、永遠に失われた。いま見えてきたことは、アトウッドが予見した「実は両陣営とも破れた」という現実である」（鷲見 266）。

このようなアトウッドの未来へのまなざしは、ディストピア小説の『侍女の物語』のなかでも少なからず見いだすことができる。2017 年 3 月の本稿執筆現在、ジョージ・オウェル（George Orwell, 1903-1950 年）の男性を主人公としたディストピア小説『1984』（*Nineteen Eighty-Four*, 1949 年）がベストセラーとなり注目されている[3]。これはドナルド・トランプ大統領の就任の時期と重なり、移民をはじめとして、白人以外の人種にとってはもはやアメリカは安全ではなくなっているという社会状況を背景としている[4]。また以下の引用にも

---

[2] 1990 年に勃発したイラク軍によるクウェート侵攻を機に、第二次世界大戦後はじめて米ソがともに武力行使にふみきった。国連の安全保証理事会での決議はマルタ会談と同様に、冷戦の集結を象徴しており、両陣営がともに協力しあっている。

[3] "The famed dystopian novel of life in a totalitarian state sat at No. 6 on Amazon's bestseller list Tuesday morning. On Monday, too, the book hovered between No. 5 and No. 7 on that same bestseller list, as CNN's Brian Stelter noted in his Reliable Sources newsletter." (Levenson)

[4] 西谷は、トランプ大統領がメキシコやイスラームからの移民の排斥、経済面においても「世界はアメリカに頼るな」という彼の言葉から、彼の歴史の忘却について分析している（『現代思想

あるように、メディアを通して繰り広げられるトランプ大統領の女性蔑視的な発言は『侍女の物語』の中心テーマにも結びついている。

> Hulu's upcoming "The Handmaid's Tale," too, strays close to reality. The dystopian Margaret Atwood book of the same name, published in 1985, is a frequently referenced feminist work about a world where women have no autonomy. In developing the show for a 2017 release, creatives found the U.S. government headed by a man who has repeatedly demeaned women. (Sonia)

現在のアメリカにおいて女性蔑視的な発言で表現される卑しめられた女性たちと、『侍女の物語』に登場する子を産む機械の「侍女」として生きる女性たちには共通して自立性（autonomy）がない。「女性には譲渡できる財産を与えるべきではない」という現代に残る家父長的な思想においても、ギレアデ政府によって自分の口座を夫のものにされてしまったオブフレッドにおいても女性の自主性は奪われている。このように『侍女の物語』は、これまでも言われてきた女性蔑視的な発言がメディアを通して公の場で広がりゆくことを予兆するかのようにして、現代のアメリカに重なってくる。

３．オブフレッドの脱出願望と他者との接触――侍女たち、オレンジ、ニック

『侍女の物語』において、品位を落とされた女性たち（demeaned women）とは一体どのような女性だろうか。この小説では男性にはそれぞれ名前があるが、女性のほとんどは雑務をこなす女中や子を産む侍女という役職名で分類されている。名前を持たない彼女たちは男性とは異なり、社会的ステータスの底辺で生きることになる。また、オブフレッドの着ている赤い服装はギレアデ政府から与えられた侍女専用の服であり、街なかを歩いても自分の存在が男性の所有物であることを示している。

オブフレッドも司令官の名前がフレッドであるからという理由で、自動的にフレッドの所有物（所有格の of＋Fred）と呼ばれている。しかし、ここで着目したいのは名前を持たないことで生じるその得体の知れない不気味さである。オブフレッドは確かに侍女以外の何者でもない。しかし、名前を持たない女性たちの登場は、フェミニズム作品としての意義をもつことが以下のように指摘されている。

> Doris Lessing, *The Golden Notebook,* Marge Piercy, *Woman on the Edge of Time,* Margaret Atwood, *The Handmaid's Tale,* Angela Carter, *Nights at the Circus,* focus on the personal stories-histories of unknown women and underscore the specific political agenda and potential of feminism. (Michael 219)

2017 年 1 月号特集――トランプ以後の世界より』。）歴史の忘却（もしくは歴史の書換え）は『1984』や『侍女の物語』でも大きなテーマになっている。

これらの名前を持たない個人の物語（“personal stories-histories of unknown women”）は、『侍女の物語』の場合、「声」であったことが作品最後の「『侍女の物語』の歴史的背景に関する注釈」の章で明かされる。オブフレッドの語りはカセットテープに残されており、時を経て 2195 年に女性蔑視的な男性の学者によってシンポジウムにて発表されるのだ。このシンポジウムに参加している教授たちの名前は先住民族に由来し、カナダの血を受け継ぐ者たちがはるか昔に滅びたアメリカの一帝国について議論している。つまり、『侍女の物語』は「安全ではないアメリカ」の末路を語っている。

オブフレッドの「声」は、なぜ「安全ではないアメリカ」で生き残り（「サバイバル」な状況をのりこえ）、時を経て「再生」されたのか。それは、名前を持たない女性たちの特徴が関係している。まず、これらのカセットテープが発見された状況を、以下の引用で把握したい。

> The item in its pristine state consisted of a metal footlocker, U.S army issue, circa perhaps 1955. This fact of itself need have no significance, as it is known that such footlockers were frequently sold as “army surplus” and must therefore have been widespread. Within this footlocker, which was sealed with tape of the kind once used on packages to be sent by post, were approximately thirty tape cassettes, of the type that became obsolete sometime in the eighties or nineties with the advent of the compact disc. (*The Handmaid’s Tale* 301)

つまりそれは、軍事放出品（army surplus）として頻繁に販売されていた小型トランクから見つかる。発表者のピークソートは、この事実は重要ではないと述べている（“[T]his fact of itself need have no significance”）。しかし、頻繁に販売されていた製品であるからこそ、カセットテープがこれまで発見されずに済んだというのは重要な事実である。オブフレッドは本当の名前を奪われたからこそ、正体不明の侍女、すなわち“unknown women”として後世に自分の声を届けることができたのもまた重要な事実だからだ。これは女性たちが名前を持たずに生きていたとしても、その匿名を利用して、身を隠しながら「声」を残すことはできるということを証明している。

ここまでは、前述した名前のない女性たちの特徴をオブフレッドに見いだした。しかし、ここでさらに、オブフレッドは「声」を残すだけにはとどまらない女性であるという点に着目したい。政府の目をすり抜けたと言ってもよいカセットテープは、オブフレッドが国外脱出をもくろんだときに経由したメイン州で発見されている。メイン州は、「地下女性鉄道」（the Underground Femaleroad）の中継地点であり、この鉄道は黒人奴隷がカナダへ逃亡するのを助けた秘密組織である「地下鉄道」に由来している。オブフレッドはカナダへ到達したかどうかは明らかではないが、彼女のテープがメイン州で発見された事実は、アメリカを脱出した先のカナダという存在を暗示している。なおかつ、脱出の試みは一度だけ

ではない。オブフレッドは過去にギレアデ共和国の目から逃れるために夫のルークと娘とともに国境を越えようとしたことがある。そのときの記憶を辿りながら逃げずにただ「座っていようとする」オブフレッドは、逃げることよりもギレアデに留まって「誰か」に触れていたいと望むようになる。

オブフレッドの他者との接触の願望は、物語の冒頭、侍女の養成所でともに暮らしている女性たちとの接触の場面ですでに描かれている。侍女になるために、オブフレッドは「小母」（Aunt）と呼ばれる女性たちによって教育を受けていた。夜、侍女の卵たちは小母たちの目を盗んで、手と手を触れあわせながら互いの本当の名前を呼びあう。

> We learned to whisper almost without sound. In the semidarkness we could stretch out our arms, when the Aunts weren't looking, and touch each other's hands across space. We learned to lip-read, our heads flat on the beds, turned sideways, watching each other's mouths. In this way we exchanged names, from bed to bed:
>
> Alma. Janine. Dolores. Moira. June. (*The Handmaid's Tale* 4)

自分たちにはまだ肉体があることに希望を抱きながら、彼女たちは誰かに触れることで自分の存在を確かめあっている。「小母」たちに見つからないように密かに行う彼女たちの儀式は、夜という限られた時間にベッドという限られた場所で行われている。結局のところ、侍女の養成所をでても自分だけの時間は夜しかない。そんなある日、オブフレッドはオレンジが喉から手がでるほど欲しくなる。

> I see they have oranges today. Ever since Central America was lost to the Libertheos, oranges have been hard to get: sometimes they are there, sometimes not. The war interferes with the oranges from California, and even Florida isn't dependable, when there are roadblocks or when the train tracks have been blown up. I look at the oranges, longing for one. But I haven't brought any coupons for oranges. (*The Handmaid's Tale* 25)

オブフレッドによれば、かつて住んでいたアメリカのカリフォルニアやフロリダ産のオレンジは入手が困難である。オレンジの品薄は、中央アメリカ（Central America）が解放軍（the Libertheos）に敗北した背景が原因となっている。彼女は上で引用している場面だけではなく、出産の祝いで司令官の妻たちがオレンジを食べているのを見て、そのオレンジへの欲求が抑えられない。ギレアデ共和国の支配下にいながらも、オレンジを欲することで旧アメリカの影を求めていると言えるだろう。

さらに、オブフレッドは、反政府側のスパイと思わしきニックの肉体を性的に求めるようになる。ニックは司令官のお抱え運転手だが、その身分をいかして、物語の終盤にオブフレッドの脱出を手配したように描かれている。オブフレッドにとって外の世界に通じて

いるニックとの性的な関係を続けることは、誰かに触れていたいという彼女の欲求を満たす手段になっている。ニックとの性的な関係を続けるうちに、肝心の司令官との行為は受けいれがたいものに変化していく。養成所の侍女たち、アメリカ産のオレンジ、ニックとの接触は、オブフレッドがギレアデ共和国の支配下にとどまりながらも脱出するかもしれないという可能性を示唆している。

４．“unnatural”なオブフレッドの肉体と感情

ここまでは、オブフレッドにとっての他者（侍女たち、オレンジ、ニック）との接触が、外部との接触につながることを分析した。侍女たち、オレンジ、ニックは他者との繋がりを象徴している。この 3 つの要素に影響を受けて、オブフレッドはギレアデの内部にとどまりながら、脱出したいという欲求をつのらせたのである。

しかし、ギレアデ政府のもとで働く司令官との「接触」は新たな展開を見せている。Miner によれば、司令官とオブフレッドの関係には、肉体だけではなく言語による性的関係（sexual activity）が秘密に行われるゲームによって成立している。

> Imaging that the Commander may ask her to engage in some kind of forbidden sexual activity, Offred is surprised when he expresses his desire: “‘I’d like you to play a game of Scrabble with me.’” As the Commander takes the Scrabble box from his desk drawer and dumps out the counters, Offred realizes that this game is forbidden sexual activity. (Miner 21)

スクラブル（Scrabble）とは 1940 年代にアメリカではじまったゲームである。このゲームの醍醐味はそのルールにあり、限られたアルファベットを用いて言葉をつくり点数を競う。このゲームは本来ならば誰も立ち入ることのできない司令官の部屋で行われている。二人は卑猥な言葉や古語をつくりはじめるなど型破りな行動をとりはじめる。この点が Miner のいう言語による“sexual activity”なのだ。オブフレッドは現在使われていない古語をつくりルール違反する。それでもその行為を司令官は許すのである。言葉を用いた“sexual activity”の描写は、肉体をともなった性的関係よりも二人の心の距離を近いものにしている。

この生身の体をつかわない性的嗜好とは反対に、オブフレッドと司令官の性行為は“recreation”ではなく“serious business”として描かれている。化学汚染物質や環境汚染が人体や食物に与えた影響で「不完全児」（“an Unbaby, with a pinhead or snout like a dog’s, or two bodies, or a hole in its heart or no arms, or webbed hands and feet”）が生まれるようになった『侍女の物語』の世界では、効率よく健全な子を産むことが女性の重要な任務になっているのだ。本来人間が抱く性的快感は、任務中にはあってはならず、“serious business”からは除外される。オブフレッドにとって司令官との性的関係は生身の体の接触ではあれ、子を産むためだけの仕事であり、「愛」や「快感」といった人間的な要素はそこに存在しないのである。彼女にとってニックとの性行為は愛のある人間的な活動であり、司令官との“serious

business”は作業にすぎない。このように、オブフレッドは性行為を 2 つの種類に分けて捉えることで、女性（人間）としての自分と産む機械（侍女）としての自分を確立している。

非人間的な要素は司令官との性行為にだけ見られるものではない。Rubenstein は、“in the perverse relations of Gilead, the distinctions between “natural” and “unnatural,” between human and nonhuman, are grotesquely inverted or reduced” (Rubenstein 16)であると、人間以外のものの擬人化を指摘しており、生き物や植物にたいして人間的な動きを見いだそうとするオブフレッドの傾向を指している。しかし、これは逆もまた然りである。オブフレッドは司令官の邸宅に赴いて以来、徐々に自分の体にまで侵入する “unnatural”な要素に困惑する。

> The air got too full, once, of chemicals rays, radiation, the water swarmed with toxic molecules, all of that takes years to clean up, and meanwhile they creep into your body, camp out in your fatty cells. Who knows, your very flesh may be polluted, dirty as an oily beach, sure death to shore birds and unborn babies. Maybe a vulture would die of eating you. Maybe you light up in the dark, like an old-fashioned watch. Death watch. That's a kind of beetle, it buries carrion.
>
> I can't think of myself, my body, sometime, without seeing the skeleton: how I must appear to electron. A cradle of life made of bones; and within, hazards, warped proteins, had crystal jagged as glass. (*The Handmaid's Tale* 112)

放射能や化学物質を蓄積した人間の体は鳥と同様に“[d]eath watch”にたとえられている。「古風な時計」であり腐肉を埋め尽くす「死番虫」となった人間の肉体は、最終的に骨でできた揺りかご（[a] cradle of life made of bones）になっている。このオブフレッドの妄想は、ギレアデ政権下では現実になりうる可能性が高い。このように、『侍女の物語』には細胞単位で汚染物質に侵食された人間の肉体と、反対に、細菌がまるで生きているかのように人間を脅かす描写が多い。これは、“human and nonhuman”の区別が非常に曖昧に、そして否定的に描かれていることを示している[5]。

しかし、ここで“human and nonhuman”の区別の曖昧化を肯定的なものとして捉えることを試みたい。オブフレッドは司令官との任務中、愛情や性的な快楽を抑圧している。かたやニックに対しては、彼への性的な欲求をつのらせている。彼女は、食事を制限されながら、子を産むためだけに使われる自分の肉体をギレアデ共和国や司令官の所有物であると認めている。それと同時に、彼女は感情を肉体から切り離すかのようにして、ニックに対しては人間性を見せているのである。つまり、彼女は生きていくために、ニックにたいして抱

[5] Bouson は 2003 年に発表されたアトウッドの『オリクスとクレイク』における細胞、遺伝に関する将来の問題性について、以下のように分析している。“In *Oryx and Crake*, a deadly serious and darkly satiric novel that, like *The Handmaid's Tale*, Atwood describes as “speculative fiction,” she intervenes parodically in the contemporary public debate about genetic engineering and provides a scathing indictment of our current “gene rush” in describing the catastrophic end of humanity in the near future－one generation or so from the present. ” (Bouson 94)

く人間的な感情と、司令官との性行為を“serious business”とみなす侍女としての非人間的な感情をつかいわけているのである。これらはギレアデ共和国で生き抜くための手段であり、オブフレッドが人間でありながらも機械的であることのあらわれである。オブフレッドは名前をもたない女性としてギレアデ共和国（男性中心社会）を攪乱する役目を果たしているだけではない。“human and nonhuman”の違いをつかいわけながら、そのような社会で生き抜く新しい女性として描かれている。

５．おわりに――もうひとりのラプンツェルとしてのセリーナ・ジョイ

本稿では、『侍女の物語』が女性にとってのディストピア小説であるだけではなく、現代のアメリカを予見する小説としてそれを分析した。カナダ小説の作家と呼ばれるアトウッドの作品にはアメリカに言及した部分も多い。かつては被植民地国家であったカナダと、大国アメリカの立場が逆転して描かれる世界で、侍女たちは子を産む機械として性的な搾取を受けている。それは、女性が非人間的な扱いを受ける未来がいつか来るのではないかというアトウッドからの警告といえる。一方、『侍女の物語』では、女性たちは男性中心主義的な政府を攪乱する役目も果たしている。侍女たちは、名前をもたないからこそ得体の知れない存在となって政府に対抗できる可能性を持っているからだ。そして、オブフレッドの場合は社会をただ攪乱するのではなく、自らの身体と感情を巧みにつかい分けながら生きていくための手段を提示している。

最後に、名前を持たない女性たちではなく、名前を「与えられている」女性にも着目したい。『侍女の物語』には侍女以外にも様々な役割を与えられた女性たちが登場するが、忘れてはならないのが司令官の妻であるセリーナ・ジョイである。このセリーナには唯一フルネームで名前が与えられており、ギレアデが政治的な権力をもつ以前から、テレビ番組にも出演して聖歌を歌うほど顔の知られている女性である。

一見すると屋敷のなかで支配権を握っているように見えるセリーナだが、彼女に与えられているのは司令官とオブフレッドの性的な行為を援助するという重要な役割である。引用はオブフレッドが司令官との任務を果たす場面である。

> Above me, towards the head of the bed, Serena Joy is arranged, outspread. Her legs are apart, I lie between them, my head on her stomach, her pubic bone under the base of my skull, her things either side of me. She too is fully closed.
>
> My arms are raised; she holds my hands, each mine in each of hers. This is supposed to signify that we are one flesh, one being. (*The handmaid's Tale* 93)

ギレアデ共和国が定めた方針は、三人（侍女、司令官、妻）の共同作業で行われる。セリーナの役目は司令官が性行為をしやすいようにオブフレッドの腕をつかんで押さえつけておくことである。彼女たちは一つの肉体（flesh）となって、同じ行為をしているように語

られるが、オブフレッドとは異なりセリーナは司令官への接触を許されてはいない。これは、誰にも接触することのできないラプンツェルとしてのセリーナを示唆している。

また、屋敷にこもり編み物をするセリーナの姿は読者にラプンツェルの姿を彷彿とさせる。アメリカの現代文学作品にはラプンツェルをモチーフにした女性が登場する[6]が、アトウッドはカナダ文学作品を分析するうえで「ラプンツェル症候群」を提示している。

> 「ラプンツェル症候群」には四つの要素がある。つまり、ラプンツェルという主要登場人物、次が彼女を幽閉している邪悪な魔女（たいてい彼女の母親か夫だが、ときとして父親あるいは祖父）、それから彼女が幽閉されている塔である。この塔は世間の態度のことで、通常彼女の家や子供といった世間で捨ててはならないと言われるものによって、象徴される。最後に「救出者」だが、実体のほとんどない美男の王子で、彼によって一時の逃避を与えられるわけである。（アトウッド『サバイバル――現代カナダ文学入門』273）

『侍女の物語』の場合、「ラプンツェル症候群」は侍女であるオブフレッドにあてはめることができる。オブフレッドという主要登場人物を屋敷（ギレアデ共和国）に幽閉している司令官、彼女を救うかもしれないニックという救出者が揃っているからだ。しかし、『侍女の物語』では、司令官の妻という名目上の役割を果たすセリーナもまた救出者を必要としているラプンツェルの一人なのである。一見したところ、司令官の妻という特権的な地位にいるセリーナこそ、夫とすら接触しないまま黙々と編み物を続けるラプンツェルであるという主張も可能となる。

先にも述べたように、現代のアメリカには依然として男性中心主義や白人至上主義が残っている。アメリカは、トランプ大統領のように女性蔑視的な発言を公の場でする者がいても許される国になりつつある。そのような状況のなか、もはや「安全ではないアメリカ」になりつつあるなかで、女性たちを分類しステレオタイプをつくりあげる[7]のではなく、「個人の物語」や「声」に目を向けなければならないのではないだろうか。『侍女の物語』はそのような問いかけをオブフレッドやセリーナにたくしているという読み方も可能となってくる。このようなテーマは今後の課題とし、白人女性であるセリーナの分析や、アメリカのマイノリティ（女性）のなかのマイノリティについても引き続き分析していきたい。

---

[6] アメリカのポストモダン作家であるトマス・ピンチョン（Thomas Pynchon, 1937 年-）は『競売ナンバー49 の叫び』（*The Crying of Lot 49*, 1966 年）で、スペインの画家レメディオス・バロ（Remedios Varo, 1908-1963 年）の『大地のマントを刺繍する』(“Bordando el Manto Terrestre,” 1961 年)を登場させている。この絵には、塔のなかでマントを刺繍する女性たちが描かれている。主人公のエディパ・マースは、平穏な生活から抜けだすことのできない自分とラプンツェルのような女性たちを重ねあわせて、涙を流す。

[7] 『侍女の物語』では、侍女や女中、小母、娼婦だけでなく、ギレアデ共和国の指針に反発する思想を持っていたり、生殖機能を失ったことを理由に「コロニー」に送られる女性たちも存在する。オブフレッドの母親はフェミニストであったため、その「コロニー」で放射線物質などを除去する作業をしている。

参考引用文献

Atwood, Margaret. *Alias Grace*. London: Virago, 1997. Print.

---. *Cat's Eye.* London: Virago, 1994. Print.

---. *Oryx and Crake*. Toronto: Emblem, 2003. Print.

---. *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature*. Toronto: Anansi, 1972. Print.

---. *The Handmaid's Tale*. London: Virago, 1985. Print.

---. *The Robber Bride.* London: Virago, 1994. Print.

Bloom, Harold, ed. *Margaret Atwood.* Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2001. Print.

---, ed. *Margaret Atwood: Bloom's Modern Critical Views.* Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2008. Print.

Bouson, Brooks J. "'It's Game Over Forever': Atwood's Satiric Vision of a Bioengineered Posthuman Future in *Orix and Crake*." Bloom, *Margaret Atwood: Bloom's Modern Critical Views*. 93-110.

Davidson, Arnold N. "Future Tense: Making History in *The Handmaid's Tale*." Bloom, *Margaret Atwood.* 21-28. Print.

Levenson, Eric. "George Orwell's '1984' hits bestseller list again." CNN News. Jan 25, 2017. Web. 25 Mar. 2017.

Michael, Magali. *Feminism and the Postmodern Impulse.* New York: State U of New York P, 1996. Print.

Miner, Madonne. "'Trust Me': Reading the Romance Plot in Margaret Atwood's *The Handmaid's Tale*." Bloom, *The Handmaid's Tale*. 21-39.

Orwell, George. *Nineteen Eighty-Four.* London: Penguin UK, 2008. Print.

Pynchon, Thomas. *The Crying of Lot 49*. New York: Buccaneer Books, 1966. Print.

Rubenstein, Roberta. "Nature and Nurture in Dystopia: *The Handmaid's Tale*." Bloom, *The Handmaid's Tale*. 21-40.

Sonia, Saraiya. "Television Takes on New Meaning in Trump's America." *Variety*. Feb 7 Feb. 2017. Web. 28 Mar. 2017.

アトウッド, マーガレット『サバイバル——現代カナダ文学入門』加藤裕佳子訳, 御茶の水書房, 1995 年. Print.

---. 『侍女の物語』斎藤英治訳, 早川書房, 2014 年. Kindle file.

オウェル、ジョージ『1984』高橋和久訳, 早川書房, 2009 年. Print.

西谷修「「アメリカ世紀」の終わり」.『現代思想 1 月号』第 45 巻第 1 号 (2017). Kindle file.

鷲見八重子 「寝盗る女」『現代作家ガイド 5 ——マーガレット・アトウッド』伊藤節編, 彩流社, 2008 年. 251-268. Print.